

三講

③念仏に遇う

- A.念仏のすすめのもの
- B.念仏に遇うこと
- C.本願との出遇い
- D.僧伽の歴史に遇うこと
- E.「遇う」について
- F.偶（遇）然と必然
- G.「悪いところがおこってくるからじゃ」

A.念仏のすすめのもの

護念坊のたよりに、教念御坊より、錢二百文、御ころざしのもの、たまわりてそうろう。さきに、念仏のすすめのもの、かたがたの御なかよりとて、たしかにたまわりてそうらいき。ひとびとに、よろこびもうさせたまうべくそうろう。この御返事にて、おなじ御ころにもうさせたまうべくそうろう。さては、この御たずねそうろうことは、まことによき御うたがいどもにてそうろうべし。（569）

衆生、仏願の生起・本末を聞きて疑心あることなし。これを「聞」と曰うなり（240）

B.念仏に遇うこと

そのゆえは、罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします。しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なきゆえに。悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆえにと云々（626）

「不簡貧窮將富貴」というは、「不簡」は、えらばず、きらわずという。（551）

C.本願との出遇い

雑行を棄てて本願に帰す（399）

源空光明はなたしめ

門徒につねにみせしめき

賢哲愚夫もえらばれず

豪貴鄙賤もへだてなし（499）

これに因って、真宗興隆の大祖源空法師、ならびに門徒数輩、罪科を考えず、猥りがわしく死罪に坐す。あるいは僧儀を改めて姓名を賜うて、遠流に処す。予はその一なり。
(398)

E. 「遇う」について

遇う 二つのものがふと出あう（漢字源） ふと途中で出あい、また約束を定めずに対面すること。（大字典）

会う 一処で寄りあう

逢う 両方から進んで来て一点で出あう（漢） その時節にあうこと（大）

値う まともにそこにあたる（漢） そこへちょうど出あいあたること（大）

遭う ひょっこりと出あう（漢） ばったりと行きあうこと（大）

F. 偶（遇）然と必然

たまたま行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ。（遇獲行信、遠慶宿縁）（149）

自己とは他なし。絶対無限の妙用に乗托して任運に法爾にこの現前の境遇に落在せるものすなわちこれなり

男女貴賤ことごとく

弥陀の名号称するに

行住座臥もえらばれず

時処諸縁もさわりなし（497）

とおきはちかき道理、ちかきは遠き道理なり。「燈台本くらし」とて、仏法を、不断、聴聞申す身は、御用をあいみて、いつものことと思ひ、法儀におろそかなり。遠く候う人は、仏法をききたく、大切にもとむる心あるなり。仏法は、大切にもとむるより、きく者なり。（878）

濁世の道俗、善く自ら己が能を思量せよとなり。知るべし。（331）

今の時の道俗、己が分を思量せよ。（360）

しかれば穢悪・濁世の群生、末代の旨際を知らず、僧尼の威儀を毀る。（359）

意を発せる衆生、阿弥陀仏国に生まれんと欲する者、みな深く懈慢国土に着して、前進んで阿弥陀仏国に生まるることあたわず。億千万の衆、時に一人ありて、よく阿弥陀仏国に生ず（330）